玄洋

館　報
玄洋125号
平成28年9月1日
発　行
一般社団法人
玄洋社記念館
郵便番号 810-0062
福岡市中央区荒戸三丁目
6番36号
西公園ハイツ201号
電話（092）762-2511
FAX（092）762-2502

玄洋社憲則

第一条　皇室ヲ
敬戴ス可シ
第二条　本国ヲ
愛重ス可シ
第三条　人民ノ権利ヲ
固守ス可シ

今号の主な内容

▽「魂の碑」で招魂祭を斎行＝2面
▽武部小四郎の玄孫、自一氏が講演会＝3面
▽賛助会員芳名録＝4面
▽進藤一馬先生講演録＝6面
▽「中野正剛先生顕彰祭」日程決まる＝7面

厳粛に執り行われた廣田弘毅先生の顕彰祭

「歴史を学ぶことが大切」

廣田先生顕彰祭を斎行

悲運の宰相、廣田弘毅先生を顕彰する「廣田弘毅先生顕彰祭」が五月十四日、福岡市中央区城内五の廣田先生の銅像前で斎行された。三十四回目で一般社団法人玄洋社記念館の主催。

晴天に恵まれ廣田先生の崇敬者、福岡市議会議員で組織する「玄洋社に政治を学ぶ議員の会」の会員、それに同記念館会員ら約五十人が参列した。福岡県護国神社の田村豊彦宮司を祭主に、廣田先生のご遺徳をしのびつつ祝詞奏上、玉串奉奠などの神事が厳かに進められた。

筑前琵琶保存会会主、青山旭子師と弟子の高木青鳳さんが、北川晃二作詞、青山会主作曲の「廣田弘毅」を献奏した。

廣田先生は八十年前の二・二六事件の騒乱を受けて首相に就任した。同記念館の吉村剛太郎理事長は挨拶で「二・二六事件当時の世相は格差社会だった。現在の世相と共通する。廣田先生は東京国際軍事裁判にA級戦犯で訴追され、文民でただ一人死刑に処せられた。一言の弁明もされなかったのは、日独防共協定締結が戦争を招いたと、忸怩（じくじ）たる思いを抱かれていたのではないか、と私は推測している。日本の近・現代史を学び教訓とすることも必要だと思う」と述べた。

国立劇場で公演

青山旭子師　念願果たす

毎年の廣田弘毅先生顕彰祭で筑前琵琶を献奏していただく筑前琵琶保存会会主、青山旭子師が念願の東京公演を果たした。

さる三月四日、一門十一人と共に、東京都千代田区隼町の国立劇場で「嶺青流筑前琵琶保存会東京公演」を開催し、源義経の生涯をたどる「義経」を語り、弾奏した。東京はもちろん北海道や九州などからも含めた五百人を超える聴衆が筑前琵琶の魅力を堪能した。

博多で生まれた筑前琵琶の、東京の舞台での演奏は、先代会主の時代からの願いで、青山師がそれを実現した。東京公演の成功を受けて青山師は「試験を受けるようなものだったが、筑前琵琶がちゃんとした芸として全国的にも認められたと感じた。いいものを後世に引き継ぐために努力しなければならないと思い、責任を感じている」と表情を引き締めていた。

鹿鳴館時代に象徴される、明治政府の急激な欧化政策に眉をひそめた頭山満翁は、女性の教育手段として筑前琵琶の普及を図ったといわれる。

国立劇場で演奏する青山旭子師

「明治十年福岡の変」招魂祭

殉難の志士を慰霊

西郷隆盛との盟約により「西南戦争」に呼応して決起した福岡藩出身青年士族による「明治十年福岡の変」で、壮烈な最期を遂げた殉難志士を慰霊、顕彰する「招魂祭」が、さる六月五日、福岡市中央区平和三丁目、平尾霊園の「魂の碑」苑で行われた。

財団法人明道会の主催。殉難志士の遺族をはじめ明道会関係者、玄洋社記念館関係者ら約三十人が参列した。

殉難志士の遺族らが参列して厳粛に執り行われた「招魂祭」

福岡県社「警固神社」の前田安文宮司によって祝詞奏上、玉串奉奠などの神事が執り行われた。

明道会の山崎拓理事長は参列者への挨拶で、百三十九年前に福岡で起こった国を思う青年士族の行動に思いを馳せ「志士の行いは尊いもの。その志士の魂を受け継ぐのが玄洋社であり、福岡の歴史の礎をつくった。歴史を尊び、明道会としても先覚の偉業の継承に取り組んでいく」と述べた。

明道会は、来年が福岡の変から百四十年の節目に当たることから、「魂の碑」苑内に生い茂っていた樹木を伐採して環境を整備した。

祭典の継続に敬意

平野國臣生誕祭を斎行

勤皇の志士、平野國臣の生誕祭が、三月二十六日、福岡市中央区今川一丁目の「平野神社」で執り行われた。

國臣生誕百九十年の年の祭典に、國臣の子孫や崇敬者ら約五十人が参列。山内勝二郎宮司を祭主に神事が進められた。

近くの鳥飼八幡宮参集殿で開かれた直会（なおらい）で挨拶に立った神社責任役員の吉村剛太郎氏（玄洋社記念館理事長）は「こういう会を通じて日本の精神文化がつながって行くものと思っている」と述べた。

大阪府豊中市から駆けつけた國臣の玄孫、原国俊氏（68）は「このように（生誕祭を）続けてくれることにお礼を申し上げる。国臣を大切にしてもらっていることを誇りに思う」と、感謝の意を表した。

福岡県護国神社の田村豊彦宮司は「共に愛国の念で行動した官軍、賊軍の犠牲の中に、今の日本がある。国を思う國臣の精神を具現化するのが今の私たちの責任ではないか」と語った。

筑前風濤録

頭山満と玄洋社

〈9〉

題字は進藤一馬福岡市長

柳猛直

試練の時代

二人は万延元年（一八六〇年）遣米使節一行の随行艦・咸臨丸（かんりんまる）が日本最初の太平洋横断をした時、一緒にこの船に乗っている。

勝は咸臨丸艦長、福沢は海軍奉行・木村摂津守の随員であった。（勝が福沢より十二歳年長）ところがこの二人は大へん仲が悪く晩年に至るまでお互いに悪口を言いあっている。

勝は幕臣で青年時代、蘭学をやりたいと思って当時高名な江戸の蘭学者であった箕作阮甫（みつくり・げんぽ）を訪ねたところ門前払いを食わされて憤慨するのだが筑前藩江戸屋敷に永井青崖（ながい・せいがい）という蘭学者がいると聞いた。この人は学問も出来るが人柄も立派だというので早速訪ねたところ、すぐ入門を承知してくれた。

永井は勝の上達が早いのと根気のいいことに驚くのだが、この優秀な門弟を秀才好きの長溥公に引き合わせた。長溥も勝がすっかり気に入って屋敷にある蘭書を自由に見ることを許してくれた。

以来、勝は長溥を非常に尊敬するのだが晩年、旧筑前藩士に対して「旧藩主の中で豪気果断で識見があった人といえば、お前さんとこの殿様にまさる人はいなかったよ」と話していたという。

福沢諭吉は青年時代、大阪の緒方洪庵（おがた・

子孫が語る「福岡の変」

武部自一さんが講演会

青年士族の反乱、「福岡の変」を、越知彦四郎とともに指揮し、敗れて刑死した武部小四郎の玄孫、武部自一さん（66）＝福岡市早良区飯倉6丁目＝が、さる六月十二日、福岡市博物館講座室で「福岡の変講演会」を開いた。

「福岡の変」は明治十年三月二十八日未明に起き、翌月三日ごろに、政府軍に鎮圧された。

自一さんは、小四郎らが決起するに至った時代背景や実行するまでには同志の間で論議があったことなど、決起までの紆余（うよ）曲折を解説。さらに決起隊各隊の決起後の官軍との戦闘の推移、主な隊員の行動、戦場になった地域の被害状況などを語った。

自一さんは、武部家に伝わる文書や各種文献を調べ、また、福岡市から筑後地区、筑豊地区に広がる戦跡を踏査するなどして「福岡の変」の研究を続けている。

自一さんにとって「福岡の変」を語ることは「義」を貫いた先祖の生き方を語ること。講演は聴く人にひと味違う感銘を与えたようだった。

先祖が戦った「福岡の変」を講演する武部自一さん

高木安吉の偉業を今日に伝える墓碑（左）と招魂碑

高木安吉の墓碑・招魂碑

路傍で伝える烈士の偉業

「福岡の変」で決起した高木（本名、高城）安吉は福岡県早良郡田隈村、現在の福岡市早良区田村三丁目の出身。決起軍大隊長の越知彦四郎とともに明治十年四月五日に政府軍に逮捕された。懲役刑に処せられ、服役先の大阪堺の監獄で同十一年六月十二日、病死した。三十二歳だった。

地元の友人、知人が同十三年、実家の近くにある寺院「西念寺」の山門脇に道路に面して墓碑を建立した。高木の師、高場乱が墓碑銘を記して高木の偉業をたたえた。

百年余りが経過し、墓碑の文字が読みにくくなったため、昭和六十二年九月二十三日、高木の子孫らが墓碑の隣に墓碑銘を再現した「招魂碑」を建立した。元福岡市長で玄洋社記念館理事長、故進藤一馬先生が「偉芳萬古」と揮毫し除幕式にも出席した。

墓碑、招魂碑は高木の偉業を伝え続けている。

こうあん）の塾で蘭学を学んでいる。

洪庵は黒田家の御出入り医師ということで長溥公にも、しばしば会っている。長溥は江戸出府、筑前帰国の際には大阪・中ノ島の筑前屋敷に滞在するのが慣例になっており洪庵は必ず伺候していた。ご機嫌伺いを兼ねて殿様が長崎で入手した近著の蘭書を拝見するのが目的であった。

安政三、四年のころ、例の如く中ノ島の筑前屋敷に伺候した洪庵が一冊の蘭書を拝借してきた。「黒田侯が珍しい原書を持っておられたので、ちょっと借りてきた」ということだったが、この蘭書は物理学の本であった。塾生たちが、この本を見た時の驚きを福沢は「福翁自伝」に記している。

かねがねエレキトル（電気）のことを知りたいと思っていたところへ、この物理書は「英国の大家フハラデーの電気説を土台にして電池の製造法などがちゃんと出ているから新奇とも何とも唯驚くばかりで一見直（ただち）に魂を奪われた」。

黒田侯はこの本を八十両で買われたと聞いて貧乏書生たちは驚くばかりであったが、これを拝借している間に書写してしまおうということになった。

塾生みんなで手分けをして取りかかる。一人が読む、一人が書く。少し疲れてくるとすぐ新手と交代するというやり方で三日二夜、ぶっ通しで写し取ってしまった。

「いよいよ今夕、侯の御出立と定まり私どもは、その原書を撫でくり回し、まことに親に暇乞いをするように別れを惜しんで還したことでございました。それから後は塾中にエレキトルの説が全く面目を新たにして当時の日本国中、最上の点に達していたと申して憚（はばか）りません。私などが今日でも電気の話を聞いて、およそその方角のわかるのは全くこの写本のおかげである」（続く）

賛助会員芳名録

平成28年度

7月20日受け付け分まで（敬称略）

▼法人・団体の部

【三万円】

警固神社（福岡市）
㈱アキラ水産（同）
㈱エー・ケー・シー（東京都）
福岡県護国神社(福岡市)
節信院（同）
駿和物流㈱（同）
㈱正興電機製作所（同）
九星飲料工業㈱（福岡県糸島市）
平野神社（福岡市）
東海大（東京都）
㈱玄南荘（福岡市）

▼個人の部

【三万円】

上田藤兵衛（京都市）
吉村剛太郎（福岡市）
花田　勲（東京都）

【二万円】

大原　毅（福岡市）
妹尾　俊見（同）
大江田　信（太宰府市）

【一万円】

吉武　義和（防府市）
吉武　健志（同）
西本　潤也（福岡市）
中本　零時（東京都）
松野尾英彦（北九州市）
山内勝二郎（福岡市）
西嶋　俊成（同）
堀内　恭彦（同）
西方　忍（同）
妹尾　正為（筑紫野市）
山田　真（福岡市）
後藤　元生（同）
戸川　愛子（同）
中村　佐枝（同）
手嶋　恭弘（同）
谷本　憲彦（広島市）
平湯　芳裕（名古屋市）
井出　純香（福岡市）
戸高　有基（津久見市）
工藤　慶（西宮市）
草野　和子（松戸市）
濱地勝太郎（栃木県下野市）
頭山　尚子（立川市）
久恒　政雄（福岡市）
秋田　清（同）
濱地　金剛（東京都）
室　潔（同）
白石　敏彦（武蔵野市）
上杉　清文（静岡県富士市）
飯島　健児（東京都）
長谷川真弓（福岡県飯塚市）
寺田　和弘（熊本市）
三木　年史（徳島市）
小石原淳一（福岡市）
内藤　武宣（東京都）
片山　悠（東久留米市）
坂井　貞夫（福岡市）
渕上　貫之（東京都）
小川　茂（福岡市）
堤田　智（同）
的野　泰庸（同）
秋吉　謙一（久留米市）
木戸　龍一（糸島市）
進藤　勇（府中市）
島津　修久（鹿児島市）
林　登（福岡市）
土肥　國夫（同）
興膳　克彦（中間市）
箱田　満輔（小平市）
田屋　憲男（横浜市）
魚谷　哲央（京都市）
坂牧　大陸（福岡市）
池内　公子（北海道遠軽町）
柴田　文雄（福岡市）
庵原　義一（古賀市）
梅本　真央（福岡市）
頭山晋太郎（同）
生武　治（同）
坂上　英雄（大阪市）
藤田　道子（福岡市）
山城　直之（同）
国松　誠（藤沢市）
縄田　智行（福岡市）
川﨑　賢冶（同）
平山　康樹（春日市）
稲員大三郎（福岡市）
廣瀬木綿子（同）
安川　重臣（同）
白土　宏（同）
村井　正隆（久留米市）
仲原　志平（福岡市）
柴田　文彦（同）
岳　康宏（同）
三原　朝彦（北九州市）
中村　旭園（福岡市）
小野　勇夫（同）
岩崎　成敏（同）
伊東　聡江（東京都）
武田　熙（さいたま市）
堺　憲一（福岡市）
大島　泰治（大野城市）
二之湯　智（京都市）
横田　進太（福岡市）
進藤　政子（宗像市）
小柳　政則（福岡市）
小石原　昭（東京都）
末永　正彦（同）
荒津　茂徳（愛知県日進市）
進藤　邦彦（福岡市）
田川　賢（茨城県守谷市）
櫻木　嵩士（徳島県阿南市）
高場　康幸（古賀市）
酒井　智堂（鹿児島市）
速開　正澄（福岡市）
青山　旭子（同）
大山　弘道（同）
福田　明彦（同）
中井　裕子（松戸市）
有馬　學（東京都）
加藤　芳子（福岡市）
堺　彪（同）
長岡　聖司（同）
箱田　慎二（神奈川県寒川町）
津田　隆士（福岡市）
濱地　光男（大府市）
山嵜　泰生（那珂川町）
光安　力（福岡市）
おばた久弥（同）
南原　茂（同）
森　英鷹（同）
冨永　計久（同）
川上　晋平（同）
打越　基安（同）
阿部真之助（同）
今林ひであき（同）
福田まもる（同）
飯盛　利康（同）
大原弥寿男（同）
大森　一馬（同）
橋田　和義（同）
津田信太郎（同）
川上　陽平（同）
調　崇史（同）
中島まさひろ（同）
堤田　寛（同）
稲員　稔夫（同）
藤本　顕憲（同）
笠　康雄（同）
国分　徳彦（同）
平畑　雅博（同）
三角公仁隆（同）
浜崎　太郎（同）
鬼塚　昌宏（同）
川口　浩（同）

お礼の言葉

このたび、賛助会員の皆様に、平成二十八年度の会費納入をお願い致しましたところ、早速、大勢の皆さまにご協力を賜りました。厚くお礼申し上げます。

本年十一月には当記念館の創設者、進藤一馬先生の二十五回忌を迎えます。進藤先生の志に沿うよう、諸事業にいっそう、力を込めて取り組む所存です。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

一般社団法人 **玄洋社記念館**

「御別館」跡で3年ぶり

晴天のもと桜の宴

晴天と200本の桜に包まれて楽しく繰り広げられた桜の宴

福岡県宮若市脇田、犬鳴（いぬなき）山系西山の中腹に残る筑前福岡藩勤皇派家老、加藤司書公ゆかりの同藩の隠し城「犬鳴御別館」跡で四月二日、第五回「福岡藩犬鳴御別館桜の宴」が開催された。

地元で組織した実行委員会（水上紀彦委員長）が主催の花見の会。前年と前々年は予定した日が雨に見舞われたため約八キロ離れた麓の小学校で開催されたが、今年は絶好の花見日和になり、三年ぶりに御別館跡での開催となった。

地元のイノシシのイノシシ汁は好評だった

石垣の前の、約二百本の桜に囲まれた広場が会場。シートが敷かれ正面に舞台が設けられた。

会費制の花見に、地元市民ら約百人が参加し、有吉哲信市長や市議会議員も宴に加わった。

挨拶に立った有吉市長は「天気よし、桜よし。本当に素晴らしい天気に恵まれ、たくさんの人に参加してもらってうれしい」と上機嫌だった。

司書公の菩提寺「節信院」（福岡市博多区御供所町）の前住職（司書公の曾孫）夫人、加藤芳子さんは「加藤司書を大事にしてくれてありがたい。司書がここに舞い降りてきているような気がする」と感謝の気持ちを述べていた。

司書公を奉賛する同市の和太鼓グループ「司書太鼓」の勇壮な演奏の後、祝宴に。同市文化連盟のメンバーが日舞など多彩な芸を次々と披露。会を楽しく盛り上げた。石垣修復の基金集めにふるまわれた、地元で捕獲したイノシシでつくったイノシシ汁が人気を集めた。

「犬鳴御別館」は、幕末、開国を迫る外国軍艦の砲撃に備え、司書公の進言で築造された。明治十七年（一八八四）に暴風雨で倒壊した。現在は石垣、階段などが残っている。

脇田地区の人々は、御別館を観光資源に育てて地域の振興を図ろうと力を尽くしている。桜の宴も、企画の一つとしてスタートした。御別館の崩れた石垣の修復運動にも取り組んでいる。

司書公は、同藩の勤皇派弾圧事件である「乙丑の獄」で犠牲になった。

建設コンサルタンツ
建設事業の計画・調査・測量・設計・施工管理
ジーアンドエス・エンジニアリング株式会社
代表取締役会長　花田勲
代表取締役社長　児玉和久
本社　福岡市博多区東比恵三丁目二四―九　〒八一二―〇〇〇七　電話（092）481―3100
東京支社　東京都杉並区高円寺南一―二三―一　〒一六六―〇〇三三　電話（03）5378―5800
営業所　千葉・浦和・神奈川・山口・佐賀・北九州・大分・長崎

福岡鮮魚市場のコア企業!!　21世紀の水産業界を領導するアキラグループ
◇鮮魚仲卸業◇
株式会社アキラ水産
代表取締役社長　安部泰宏
本社　福岡市中央区長浜3丁目11―3―711　電話092―711―6601（代表）
関連会社／株式会社ウトク水産

学生会館（学生寮）・単身者向け事業
受託給食・F&B（レストランサービス）事業
株式会社玄南荘
代表取締役社長　渕上髙当
本社　福岡市中央区荒戸二―三―四一　TEL〇九二―七二五―六七一一　FAX〇九二―七二五―〇六二三
HP　http://gennanso.com/
MAIL　fukuoka@gennanso.com

造園・緑化　自然とコミュニケーション
株式会社別府梢風園
代表取締役社長　別府壽信
本社　〒813-0025　福岡市東区青葉一丁目六―五三　TEL〇九二―六九一―〇六七八（代）　FAX〇九二―六九一―四五五四
E-mail：info@shoutuen.co.jp

（財）日本医療機能評価機構認定
HARADOI HOSPITAL
原土井病院
――開放型病院・臨床研修指定病院――
理事長　原寛
〒813-8588
福岡市東区青葉6丁目40番8号
☎092-691-3881（代）
http://www.haradoi-hospital.com/

郷土・福岡が生んだ憂国の大政治家

進藤一馬先生講演録 ②

馬上の中野正剛先生

中野先生は修猷館、早稲田、そして朝日新聞の記者となって、新聞記者でありながら大いに政治の中に入り込んでいろいろ桂内閣に対する攻撃運動なんかをされたのであります。自分が朝日新聞に入られて、緒方竹虎先生にも「お前もぜひ朝日新聞に入れ」ということで、後に緒方先生も朝日新聞に引き入れられまして「朝野の政治家」その他新聞紙上政界を論評し一躍天下にその名文が宣伝されたことがあったのでございますが、そういう中野正剛先生の活躍が新聞記者時代にあった。

しかしながら、その新聞社を辞めて「東方時論」という雑誌の社長となり、「東方時論」を出しながら、第一次欧州大戦のパリの講和会議に特派員として行かれた。パリの講和会議には日本は西園寺公をその代表として送り、牧野、珍田、いろいろそういう人たちを大使として送ったのでございますが、パリのベルサイユ宮殿の中の平和会議場における日本の態度が本当に見るに見られぬ愚劣なる外交。何もやらない。フランスの顔色をうかがい、イギリスの意向をうかがい、中国からさんざんにやられたのでありますが、それに対する日本の態度の不甲斐なさに、講和会議の途中、まだ終わらないうちに、こんなことでは日本の将来がどうなるか危ういということで帰り、「講和会議を目撃して」との演題で会議の実情を訴え、また本を出し、全国民に日本の政治、上層部の政治はこういう体たらくだということで演説して回られた。それが中野先生の最初の政治に入られた道であったのであります。

そんなに講和会議でも最後まで見ておれない。矢も楯もたまらず、一月に行って、途中、三月に帰ってきておられます。それが中野正剛先生の気性である。じっとしておれないのであります。それは短気でもあります。気も短い。激しい気性である。しかしながら、それはみんな国を憂えるからの気性である。公憤であります。公の慨嘆であります。そういうふうに常に国家の将来が頭から離れない。

家庭的には早く長男を亡くし、奥様も早く亡くなられ、次男も亡くし、自分の足も医者の間違いから切断せざるを得なくなって、家庭的には非常に不幸であります。そういう不幸を少しも苦にしないというか、心は痛みながらも公のことに向かっては憤然として戦ってこられた。

ガタルカナル以後の日本の国力、既に日本はガタルカナルにおいて七対三の勢力しかないような状態になっておって、それを政府が隠しまくって戦争を続けておる。この実態を一日も早く国民に徹底させて、国民の自覚を促して、何とかこれを挽回しなければ日本は危うしということで、東条との対決が始まったのでありますが、そういう先生の最後の戦い。そのためには元老、重臣をいちいち説いて回って「東条を早く辞めさせなければ日本の将来は危うい。戦いが敗れる」ということで回られました。

そして最後に重臣一同が東条一人を華族会館に呼び出して、懇談を行って東条に辞職の勧告をするということであったのが、その最後の重臣会議に東条が部下数名を連れてきて言い逃れ、それだけでこの重臣会議は終わった。中野先生は日本の重臣というものはおもちゃの兵隊みたいで、ネジをかけておる間は何とか動いておるけれども、ネジが止まるとばったり。何の力もない。本当にその不甲斐なさに慨嘆されましたが、そういう体たらくの日本の政治であったのであります。

中野先生は平素、「人間は現在の刻一刻が余生命であり、修養の活舞台である。あらゆる環境に対して最善を尽くし、全生命を躍動させしめながら、その精神の最高潮に立ったときに自分の生命が絶たれるということが、その人生の一番の生き甲斐である。それは城山における西郷南洲の心境、あるいはキリストの十字架における心境は、人間が精神力の最高潮のときに既にそれが神となって魂が散ずるという。これでなければ英雄じゃない。聖人でもない。自分もそういう死に方でありたいものだ」ということを言っておられたことがありますが、中野正剛先生が十月二十六日に警視庁から憲兵隊を経て帰ってこられた際に「先生、東条との勝負はどうでしたか」と、うちの人が聞いたときに、「ああ、もちろん俺の勝ちだ。今度は大きなことをするのだ」ということを言われたというのでありますが、既に中野先生の心の中には死を決しておられたことが想像されるのであります。

（続く）

進藤先生のご遺徳さらに大きく

第6回「桧原桜賞」決まる

福岡市南区桧原一丁目の「桧原桜」にまつわる元福岡市長で玄洋社記念館創設者、故進藤一馬先生の心温まるエピソードを心の宝とし、同区の発展に役立てようと創設された短歌のコンクール「桧原桜賞」（同賞実行委員会、福岡市など主催）の第六回公募分の入賞作の表彰式が三月二十七日、同区大橋一丁目の九州大学大橋サテライトで行われた。

尺八の吹鳴に合わせて入賞作が吟詠され、表彰状が手渡された。

今回は、従来の実績を大幅に上回り、全国四十六都道府県と海外の四十三人を含め二千八百二十二人から五千六百八十二首の応募があった。

「桧原桜」は同市の道路拡幅計画で伐採の運命にあった九本の桜を、進藤先生が市民の助命の短歌に短歌で応えて計画変更し救った。今は桜の公園になっている。進藤先生のご遺徳は、年を追うごとに光を増している。

入賞作のうち「福岡市長賞」は次の通り。

▽一般の部＝西行を偲びつつ見る山桜われもこの世の過客の一人（横浜市・合志義文）▽中高生の部＝十六夜が淡く夜桜照らしだす見つめる母に毛布を渡す（大阪府立天王寺高2年・大川千明）▽小学生の部＝春風と寒のもどりがおにごっこ行ったり来たり雨・雪・桜（麻生学園小6年・尾崎結仁）

表彰状を受ける入賞者

福岡だより

クルーズ船寄港数

博多港が日本一に

平成二十七年度

福岡市の海の玄関、博多港が脚光を浴びている。国土交通省は先ごろ、昨年一年間に海外からの観光客を乗せたクルーズ船の寄港回数が全国で一番多かったのは博多港だった、と発表した。

二位は同じく九州の長崎港。ここ数年一位の座に君臨してきた横浜港は三位に下がった。

全国の寄港数は過去最高の千四百五十四回で前年比二百五十回増。うち博多港の寄港数は前年より百四十四回多い二百五十九回だった。人数で言えば全国が約百十一万人で、博多港は約五十八万人。中国をはじめ東アジアからの〝爆買い〟訪日客の急増で、地理的に近い博多港の有利性が表れたといえる。

博多港に入港したクルーズ船は「クルーズセンター」がある博多港の中央ふ頭に着岸する。船からどっと客がはき出されバスに吸収されて市街地へ向かい「タックス・フリー」の表示のある店に吸い込まれていく。そんな光景が同市では日常的に見られる。

大きなビルのようなクルーズ船

「中野正剛先生顕彰祭」を開催

本年の「中野正剛先生顕彰祭」を、次のとおり開催します。どなたでも参加できます。参加希望者は、中野正剛先生顕彰会事務局へ電話またはＦＡＸで早めにお申し込みください。

◇**日　時**　平成28年10月22日（土曜日）午前11時開始

◇**場　所**　鳥飼八幡宮境内「中野正剛先生銅像」前（福岡市中央区今川2丁目1-17）

◇**参加費**　式典だけ参加の方は千円、直会（なおらい）にも参加の方は、ほかに3千円。

◇**電　話**　０９２・７６２・２５１１

◇**ＦＡＸ**　０９２・７６２・２５０２

中野正剛先生顕彰会

玄洋社関係史料の紹介

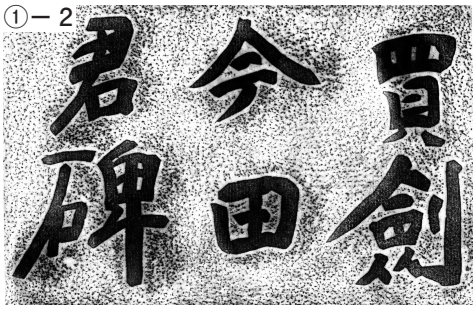
石瀧　豊美

同時代から見た頭山満 ⑪

―書と人物―

第67回

①－1

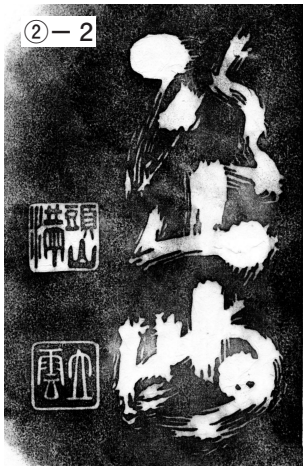


①－2

今回は東京、多磨霊園と谷中霊園の墓碑・記念碑を紹介する。①―1（写真）は多磨霊園の「買剣今田君碑」。碑面の上部に題額、その下に碑文がある。①―2（拓本）が題額部分で頭山満の書。頭山満には珍しい書体で、しかも竹筆ではない。改まった墓碑・記念碑に揮毫する場合は竹筆を使わない場合があるが、これもその例と言える。

今田は諱を正虎、字を主税、買剣はその号である。嘉永六年（一八五三）～昭和五年（一九三〇）。平野国臣研究家。編著に明治二十五年（一八九二）刊の『国士模範平野次郎国臣伝』がある。同書付載の出版広告によると別に『国士模範平野国臣伝』（製本既成）があり、伯爵副島種臣公序と筑前頭山満君叙を付す。今田と頭山に早くから親交のあったことがうかがわれる。前者刊行時には後者は未刊のようだが、同年に刊行された。国臣の獄中紙捻文字の石版摺を付載（広告）。ただし、後者は石瀧未見。なお、陸軍少将今田新太郎はその長男。

②－1


②－2

②―1は多磨霊園の「中野正剛碑（原題なし）」。碑文は「友人　蘇峰徳冨正敬撰」（八十一歳）、「同学　緒方竹虎書」。題額は「魂」を頭山満が揮毫している（竹筆）。②―2は題額の左端にある署名部分（これも竹筆の特徴がよく出ている）と「頭山満」「立雲」の二つの印。

蘇峰の文章の書き出し部分を写すと、「中野正剛君、昭和十八年十月二十七日暁、東京都渋谷ノ邸ニ自裁ス。人其ノ何故タルヲ知ル者無シ。」

③

③は多磨霊園の「内田良平之墓」。「頭山満書」で、二個の印影（「頭山満印」「立雲」）も彫り込まれている。裏面に「昭和十二年七月二十六日逝去　享年六十四歳、昭和十三年七月二十六日建之（これをたつ）」。

④は谷中霊園の「来島恒喜之墓」。③と同様に「頭山満書」で、「頭山満印」「立雲」の印影を彫る。裏面に「来島恒喜碑陰記」があり、明治二十二年（一八八九）に自刃した来島の五十年祭を機に昭和十三年（一九三八）十月十八日（五十回忌の祥月命日）に墓碑を改築したもの。来島恒喜の墓は福岡市博多区千代の崇福寺内玄洋社墓地にもある。

④

※以上、多磨霊園の写真と拓本は佐藤誠氏・佐藤晃生氏・神田優氏、谷中霊園の写真は佐藤誠氏による。